

暮らしやすさへの影響形態を考慮した生活環境要因の分類

名城大学 学生員 ○伊東 裕晃
 名城大学 正会員 松本 幸正
 名城大学 学生員 黒川 卓司

1. はじめに

多くの市町村において生活環境に対する住民意識調査が実施されている。ところで生活環境要因には、整備を行うことで住民の不満感が解消され暮らしやすい評価につながるものがあるれば、住民の不満感は解消されるものの整備を当たり前と感じ暮らしやすい評価にはつながらないものもあると思われる。

そこで本研究では、愛知県豊田市で実施された住民意識調査の結果を用いて分析を行い、生活環境要因ごとの特性を明らかにする。

2. 満足反応型、不満反応型、両反応型の定義

本研究では、豊田市において平成15年に実施された、第15回市民意識調査の結果を用いて分析を行う。設問として、生活環境に対する総合的な評価（以下、暮らしやすさ）と、19項目の生活環境要因に対する評価を用いて、豊田市を、猿投、挙母、高橋、高岡、松平、上郷の6地区に分割して分析を行った。

暮らしやすさと生活環境要因に対する評価を用いてクロス集計を行い、例として表1、表2のようになったとする。表1は、生活環境要因に対して満足と評価した場合には多くが暮らしやすいと評価している。一方、生活環境要因に対して不満と評価した場合には暮らしやすさへの評価はバラバラとなっている。表2は、生活環境要因に対して不満と評価した場合には多くが暮らしにくいと評価している。一方、生活環境要因に対して満足と評価した場合には暮らしやすさへの評価はバラバラとなっている。

このような場合、Cramer's V は小さめに算出されるものの、満足評価側、不満評価側だけを見た場合には強い関連がある。そこでこのような2つの関係を定量化するために、評価を満足とそれ以外、不満とそれ以外とし、2種類の方法でクロス集計を行う。なお、評価を満足とそれ以外とした場合のCramer's V を満足反応値、不満とそれ以外とした場合のCramer's

表1 生活環境評価と暮らしやすさの例1

		暮らしやすさ		
		暮らしやすい	どちらでもない	暮らしにくい
生活環境に対する評価	満足	85	10	5
	どちら	10	80	10
	不満	30	30	40

表2 生活環境評価と暮らしやすさの例2

		暮らしやすさ		
		暮らしやすい	どちらでもない	暮らしにくい
生活環境に対する評価	満足	40	30	30
	どちら	20	60	20
	不満	5	10	85

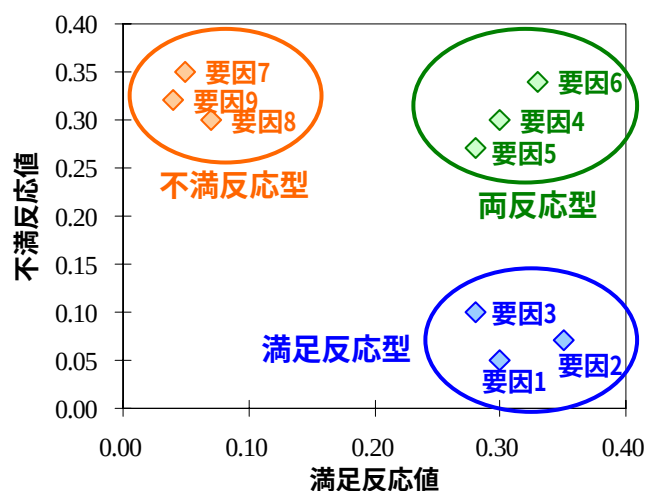


図1 満足－不満反応分布図の例

V を不満反応値と定義する。

横軸に満足反応値、縦軸に不満反応値をとり、各生活環境要因の値をプロットしたものを満足－不満反応分布図とし、図1に例を示す。この図において右下方に位置する生活環境要因は、満足と評価したときは暮らしやすい評価につながるが、不満と評価したとしても暮らしにくい評価にはつながらない。これを満足反応型と定義する。一方、左上方に位置する生活環境要因は、不満と評価したときは暮らしにくい評価につながるが、満足と評価したとしても暮らしやすい評価にはつながらない。これを不満反

キーワード 意識調査、生活環境、暮らしやすさ、Cramer's V、満足度

連絡先 〒468-8502 名古屋市天白区塩釜口1-501、名城大学理工学部建設システム工学科 TEL:052-838-2348

